

山桜

吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりにき

古く西行法師がうたったように、吉野山の桜は山全体に爛漫と咲き広がるその見事な景観で広く名を知られている。下千本から中千本、上千本と開花していき、毎年四半ばに迎える見ごろには、吉野山は花見客で身動きもできないほどのにぎわいを見せる。同じ桜を、西行法師をはじめ古来多くの人々が愛でてきたことを思うと、その桜の美しさへの憧憬の念が歴史を経て我々の心に深く息づいていることを感じずにはいられない。中でも太閤秀吉の花見はことに有名であるが、吉野山の桜もまた、そんな人々、歴史そのものをずっと見続けてきたとも言える。

ところで、この吉野山の桜は山桜であることを知っているだろうか。三万本と言われる桜の木多くはシロヤマザクラという品種である。日本の桜の名所の多くは近代になってから整備されたものが多く、その桜の種類は、若葉の前に花の重みで枝が垂れ下がることが多く一気に咲き誇るソメイヨシノがほとんどである。このソメイヨシノの華やかさに比べると、若葉と同じくして花開く山桜は、派手さはないものの、控えめな中に気品を漂わせたたずまいである。わたしは、この山桜が好きだ。吉野山の山全体を淡い桜色に染める桜の美しさはもちろん好きである。しかし、わたしの心の奥底にいつも凜としてその花を咲かせているのは、山の奥深いところで人知れずひっそり咲いている山桜なのである。

その山桜との出会いは、わたしが中学生のときのことである。当時、わたしはバレーボール部に所属しており、練習に明け暮れる毎日であった。試合の出場メンバーとなることを目指して必死に練習に打ち込み、努力は人一倍していたつもりであったが、なかなかそのメン



吉野山の桜（読売新聞提供）

バーに入ることはかなわなかった。地区予選を一週間後に控えたある日のこと、監督がみんなを集めて言った。

「次の試合は、県大会につながる大切な予選だ。これまで皆で精一杯練習に打ち込んできた成果を出そうじゃないか。試合の出場メンバーをこれから発表するが、試合に出る者も控えの者も変わらずこのチームの大切な一人一人だ。地区予選突破に向けてそれぞれが自分のポジションで力を尽くしてもらいたい。」

わたしはドキドキしていた。監督はああ言うが、試合の出場メンバーにはみんな選ばれたいに決まっている。そのためにこれまで苦しい練習に耐えて頑張ってきたのだ。何よりわたしは今回は自信があった。最近、練習では調子がとてもよかったし、チームメイトもそのことを認めてくれている。わたしは監督の口もとをじっと見つめた。

「次の試合のメンバーは、山本、吉田、山田……。」

結局、今回も監督がわたしの名前を呼ぶことはなかった。その日の帰り、これまで以上にわたしは落ち込んでいた。チームメイトは残念がって口々になぐさめてくれたが、わたしはそんな言葉など全然耳に入らなかった。これだけ頑張ってもやはり駄目だった。やっぱり自分には才能がないのだ……これまでどこかにそう思う自分がいた。でも必死にそう考えないようにしてきたのだ。努力すれば必ず結果が付いてくるはずだ。そう自分に言い聞かせて、今日まで頑張ってきた……なのに……。何かで自分の中でポツキリと折れたようだった。

「優子、入っていいか。」

その日の夜、いつものように遅く帰ってきた父がわたしの部屋をノックした。家に帰ったわたしの様子がおかしいことに気付き、どうしたのかと根掘り葉掘り聞く母に、バレーボールはもうやめるんだとわたしは言い放って部屋に閉じこもっていた。部屋に入ってきた父は言った。

「なあ、優子。明日、部には行かないのか。」

「行かない。やっぱりわたし、才能がないのよ。頑張ったところで出場メンバーにはなれっこないしね。」

わたしは投げやりな気持ちでそう言った。多分、父のお説教がこの後始まるんだらうと思いつながら……。ところが父の言葉は意外なものだった。

「そうか。それなら明日は休みだし、一緒に花見に行かないか。」

次の日、わたしは初めて部の練習をサボって、父と花見に出かけた。吉野山の桜は本当に見事だった。戻る車の中で、わたしは父に言った。

「お父さん、桜、きれいだったね。あんなに美しい花を咲かせて、多くの人々に見ても

「な、え、喜んでもらえて。桜たち幸せだよね……それに比べて……。」

「そう父は言うよ、吉野川沿いの国道から千石橋を渡ってさらに山の方に車を向けた。わたしは、吉野山の桜を思いながら、いつか試合で活躍することを夢見てバレーボールの練習に打ち込んできたこと、そんな自分を横目に友達は次々と試合に出ていくこと、自分には才能がない、これ以上続けてもおそらくずっとこのままだろうことなど、堰を切ったように父に話した。父はずっと黙って聞いていた。やがて父は車を止めた。」

「優子、少し歩こうか。」
車を降りて、細い山道に入った。どこに行くのだろうか。わたしは父と一緒に山道を登りはじめた。次第に山道は細くなり、辺りはどんどん山深くなっていく。やがて父は山道から外れ、道なき山の中を、草をかき分けながら進み出した。

「ちよっとお父さん、こんな所に入っていくの。」
言いながら、わたしは黙々と歩く父の背中を必死に追いかけた。父の背中には、それ以上何も言えないような霧囲気が感じられた。十分も歩いただろうか、父が突然歩みを止めた。

「優子、見てごらん。」

一本の山桜がわたしたちの目の前で、今が盛りとばかりその花を咲かせていた。他の緑の木々に混じって埋もれそうになりながら、それでも精一杯に咲いている。それを見た瞬間、父がわたしに言いたいことが胸の中に伝わってきたような気がした。

「優子、あの山桜は毎年、あそこであやうって咲いているんだ。周りをいろいろな木々に囲まれ、その中で目立たないかも知れんが自分の花をあやうって精一杯咲かせている。だれも見に来る人はいないし、だれも知らない。でも自分の花を力の限りに咲かせて、そして人知れず散っているのさ。そしてまた次の年、見る人もない自分の花を咲かせる。だれかのために咲いているのではない。だれに気付いてもらわなくとも、ただ精一杯自分の花を自分らしくあやうって毎年咲かせているのさ。」

胸の奥に熱いものがこみ上げてきた。たった一人で力の限りにその花を咲かせている山桜が、わたしの目の中で揺れ、そしてにじんだ。
「父さんは昔から何かうまくいかないことがあると、山桜を思い出すんだ。仕事でもそ



うさ。自分では精一杯やっていても必ず報われるとは限らない。認めてもらえないことも多いさ。そんなとき、人知れず花を咲かせている山桜を思い出すんだ。だれのためでもなく、ただ自分のために、自分らしくあるために凜とその花を咲かせている山桜をね。優子、自分の花は自分のために精一杯咲かせればいいんだ。そのために力一杯頑張ればいいのさ。」

そう自分にも言い聞かせるように話す父の姿を見ながら、あまり普段は愚痴をこぼしたり、声を荒げたりすることのない父が、ときおり深夜一人でお酒を飲んで顔を真っ赤にしていることがあるのを思い出していた。あんなとき、父は山桜を思い出して胸に込み上げてきた。同時に、何かよく分からないけれども温かいものがわたしの心の中を満たしていくのを感じた。「自分らしくあるために、自分の花を……か。」

その日から、わたしのものの見方が少し変わった。バレーボール部では相変わらず出場メンバーにはなれなかった。しかし、練習はもちろん、試合中の応援にも身を入れてやるようになった。地区予選は結局突破できなかったが、チームメイトと流した涙は、試合に出られなかった悔しさからでは決してなかった。ただ自分がそのときできることを精一杯にすることの大切さ、そしてそんな精一杯の気持ちでどこに向けるのか、何に向かって頑張るのか、自分らしさとは何なのか、そんなことを、父とあの山桜から教わった、いや、考えさせられたようにわたしは思うのだ。

父と見たあの山桜は、今もわたしの心の奥底ですっとわたしを支えてくれている。今年も桜の季節がまたやってくる。

○ 人知れず咲く山桜を見せ、父が「わたし」に伝えたかったのは何だったのだろうか。

○ あの日の山桜が、今も「わたしをずっと支えている」というのはどういうことだろうか。



山 桜

奈良県教育委員会

<http://www.pref.nara.jp/gakko/> (学校教育課Webページ)

